

## 東日本大震災と伝説

— 「みちびき地蔵」の再話について—

森 覚

### 1 はじめに

本論文は、東北の津波災害を伝える物語として再話されてきた「みちびき地蔵」という伝説の形成と変遷について考察するものである。

「みちびき地蔵」とは、大津波で亡くなった人々の霊を極楽浄土に導いたと伝えられる宮城県気仙沼市大島で祀られてきた三体の地蔵菩薩木像に関する縁起譚である。<sup>1</sup> これまで「みちびき地蔵」の作品は、何度かメディア化されており、その表現方法には、差異がみられるものの、物語の大まかなプロットは、ほぼ同一である。このため、作品相互の共通点を拾い上げることにより、伝説の内容的概要を説明することが可能である。伝説の冒頭では、大島の外浜で田植えの手伝いを終えた若い母親と幼い息子が家に帰る様子が語られる。母と子が日の暮れた暗い道を歩いていると、途中にある地蔵のあたりで、不思議な光景を目にする。そこで見たものは、地蔵に参拝するために列をなした大勢の亡者たちの姿である。その中には、知人の顔もあり、恐ろしくなった母親は、息子と共にその場から逃げ出す。家に戻った後、自分の亭主に見てきたことを話すですが全く信じてもらえない。ところが翌日、母親の不安は現実のものとなり、突如として押し寄せた大津波によって、沿岸の陸地が呑みこまれる。息子と亭主とともに、高台の松山へ逃げて難を逃れた母親は、昨日の晩に見たことがこの災害の予兆であったことを確信する。これ以降、地蔵は、死者の霊を導く「みちびき地蔵」と呼ばれ、信仰されるようになったという。

東日本大震災の発生直後「みちびき地蔵」は、その内容ゆえに、インターネット上で話題となり、実際に起こった被災地の津波被害を彷彿とさせる昔

話として、国内外から注目を集める。<sup>2</sup> とくに伝説の地である大島は、津波によって島が三つに分断されるという事態に見舞われたことから、この物語は、歴史的事実にもとづくものとして再解釈され、震災後から絵本やウェブ動画などの作品として、さまざまなメディアで再話されている。人間にとって伝説は、何らかの歴史的出来事にもとづいた共同体の価値観や世界観を内包する物語である。諸個人は、物語に登場するキャラクターの行動から、その時代の道德規範や世界観などを学び、あるいは、ある出来事を契機として再解釈し、時代ごとの読者に受け入れられる物語に語り変えるという再話を行ってきた。<sup>3</sup> この意味では、東日本大震災において注目された「みちびき地蔵」もまた、繰り返される再話によって、さまざまなメディアを通じ、作り変えられてきた伝説といえる。

## 2 津波災害と伝説

### 2-1 明治三陸地震津波の被害状況

東日本大震災以降、一躍脚光を浴びるようになった「みちびき地蔵」が、明治時代に東北三陸沿岸部を襲った大津波にもとづいた伝説であることは、すでに早い時期からインターネット上で指摘されている。たとえば、「NAVER まとめ」というサイトでは、「昔話「みちびき地蔵」から学べ！現代に活かすべき津波の教訓」と題して、「みちびき地蔵」の伝説が紹介される。ウェブページ上では、1896年の明治三陸地震と1933年の三陸大津波の写真が掲載され、それと対比させるように、東日本大震災における気仙沼大島の津波被害の写真が、「▼物語の舞台が、再び被災地に・・・。」というキャプションと共に配置される。<sup>4</sup> また、そもそも「みちびき地蔵」が注目されるきっかけとなったのは、1977年に放送された「みちびき地蔵」のアニメーションが、震災から2日後の3月13日に、動画投稿サイトのYouTubeへアップロードされたことによる。この動画は、すぐに、国内外からアクセスがなされはじめ、最終的に、624,143回という再生記録を達成している。アニメを公開した shurikens3 というユーザーは、この動画に「宮城県気仙沼のお話です。あまりにも今回の災害と重なりましたのでアップさせていた

できました。亡くなられた方々にご冥福をお祈り申し上げます<sup>5</sup>というコメントを残している。これらのサイトの正確性や信憑性は、別として、インターネットにおいて「みちびき地蔵」の伝説が、リアルタイムで起きている津波被害に結びつけられて解釈されたことは、こうしたところから明確に読みとれる。

「みちびき地蔵」の伝説が流布する気仙沼の大島とその周辺地域となる三陸地方は、昔から度重なる津波の被害を受けてきた地域である。記録に残っているものとしては、869年の貞観大津波が最初で、それ以来、17回の津波襲来が起きている。東日本大震災に続き、東北地方において過去2番目の大災害となったのは、1896年6月15日に発生した明治三陸地震津波である。岩手県宮古沖を震源として起きた地震は、マグニチュード8.5という大きなものだったが、規模の割に三陸沿岸部をはじめとする地上の揺れは、震度2から3程度の軽い揺れしか起こらず、とくに被害はなかった。しかし、19時32分に起きた地震から40分後には、北海道から宮城県牡鹿半島の海岸にかけて津波が押し寄せ、死者22,000人余りの大惨事をもたらした。また、その日は、旧暦5月5日という菖蒲の節句にあたり、春からの豊漁が続いたこともあって、多くの家庭では、祝いの団欒の最中であつた。そこへ突然打ち寄せた津波は、人々が逃れる間もなく住宅もろとも呑みこんでいったのである。<sup>6</sup>

1903年に宮城県が県内の津波災害を総括する目的から刊行した『宮城県海嘯誌』には、この津波から生き残った人の逸話が記されており、この中には、大島の被災者から聴取した記録が一つだけ載せられている。それは、横沼という地域に暮らしていた漁師の妻である伊藤まつの(34歳)が、3人の息子と就寝中に津波に襲われた時の体験談である。記録によれば、雷鳴のような音がしたかと思うと、津波が浸入して家屋は全壊し、まつのは、息子たちと共に海へと投げ出されたという。その後、材木、板戸、壁、庇にしがみつきながら漂流し、救護艇に助けられたが、12歳の長男以外は皆溺死してしまう。また、まつのの夫である養之丞は、気仙沼町から家の裏まで帰宅した時に津波が押し寄せ、家屋ともども家族が流されていくのを目撃している。<sup>7</sup>

## 2-2『みちのくの民話』の記述

「みちびき地蔵」が、本当に実際に起きた三陸地方の津波災害を下地にした伝説であるかどうかについては、当時の被害記録とメディア化された「みちびき地蔵」の作品の記述を比較することにより証明できる。なかでも1956年に未来社より刊行された『みちのくの民話』という民話集に収録されている「導き地蔵」には、明治三陸地震津波の状況を参照したと考えられる記述が三つの箇所がある。まず、第一の箇所は、この「導き地蔵」の物語が、日時を特定していることである。物語の中盤部分には、次のような記述が出てくる。

つぎの日は朝からすばらしい上天気でした。ちょうど五月五日のご節句ではあり、その上一年中で一ばん潮がひく、大潮の日でもありましたので、浜は村中の人でたいへんなにぎわでした。<sup>8</sup>

明治三陸地震津波が起きた1896年6月15日は、旧暦の5月5日にあたり、この記述と同様に端午の節句であったことから、物語との一致がみられる。

第二の箇所は、時間の共通である。「導き地蔵」には、次のような記述がある。

夕方にはだれもかれも、みんな持ちきれないほどのえものを持って、にこにこ顔で、家に戻りました。

ご節句のごちそうをいただきながら、今日のふしぎなえものの喜びを、語り合う楽しそうな話し声が、家々からもれている八時ごろです。

とつぜん、ドドーンという大きな音が、つづいて鳴りひびきました。<sup>9</sup>

明治三陸地震津波において最初の地震が起きたのは、19時32分である。それから40分後の20時10分頃に津波の第一波が押し寄せており、「導き地蔵」に記された「八時ごろ」という記述にはほぼ一致する。

最後に、第三の箇所は、「導き地蔵」の結末部分に記される津波の犠牲者

(244)

数である。

この時のつなみで、大島では、死んだ人が六十一人、死んだ馬が六頭あったと、書きつけに残っています。<sup>10</sup>

宮城県が刊行した『宮城県海嘯誌』の「第四章 雑篇」にある「(第二)被害総額」という一覧には、「みちびき地蔵」の舞台である大島の被害状況が記録されている。ここには、「溺壓死」という項目の合計が61人とあり、この数は、「導き地蔵」の記述と完全に合致する。また、興味深いことにこのリストには、「馬」の項目もある。ただし数字は4頭となっている。<sup>11</sup>

これらの記述は、『みちのくの民話』に収録された「導き地蔵」で語られる大津波の場面が、明治三陸地震津波にもとづくことを示すものとなる。2012年現在、大島観光協会の会長職を務めている白幡昇一によれば、みちびき地蔵は、白幡家の氏神として祀られてきたものであったという。元々、白幡家は、海沿いの地域に住んでいたが、1896年に起きた明治の大津波で被災し、みちびき地蔵と共に、内陸の現在地へ移住する。<sup>12</sup> 白幡家の氏神が、どのような経緯で地域における伝説の対象とされるようになったのかは、不明である。ただし、明治三陸地震津波以降、三陸沿岸部の各地域では、甚大な被害と災害の教訓を後世に伝えるモニュメントが同時的に作られており、それが伝説を生む要因となったことは確かである。たとえば、宮城県東松島市の宮戸島には、「みちびき地蔵」と同様に、津波にまつわる地蔵がある。「両岸から来た津波がここで合わさって人が死んだ。これより高い場所に逃げよ」という古い言い伝えと共に、昔、津波が到達した地点に、三体の地蔵菩薩像を祀る。<sup>13</sup> 三体の地蔵が祀られているという点では、大島のみちびき地蔵と共通しており、伝承も類似している。また、地蔵ではないが、岩手県宮古市姉吉地区には、大津波記念碑と呼ばれる石碑がある。この石碑には、「高き住居は兒孫の和樂 想へ惨禍の大津浪 此処より下に家を建てるな」、「明治二十九年にも、昭和八年にも津浪は此処まで来て 部落は全滅し、生存者、僅かに前に2人後に4人のみ 幾歳経るとも要心あれ」という文字が

刻まれている。<sup>14</sup>

### 3 作品をめぐる二つの系統

#### 3-1 「みちびき地蔵」の諸作品

「みちびき地蔵」の伝説は、もともと宮城県気仙沼市大島とその周辺地域に暮らす人々が口伝えによって伝承してきた口承文芸である。しかし時代とともに民話の語り手は減少し、それに代わってメディアが新たな語り手となった。

現在、「みちびき地蔵」の伝説を題材にした作品は5つある。もっとも初期のテキストは、1956年6月に未来社より刊行された『みちのくの民話』に収録されており、そのタイトルは「導き地蔵」となっている。『みちのくの民話』は、語り手がいなくなりつつある民話という過去の遺産を一人で読むことによって継承し、物語にこめられた祖先の知恵を現代の生活に活かすという意図によって児童教育の観点から制作された東北地方の民話集である。<sup>15</sup> 編集を手がけたのは、東北農山漁村文化協会（以後、農文協と記す）という団体である。農文協は、1940年の創立以来、農村・山村・漁村文化の向上を目的とした活動を展開している。出版にあたっては、「民話の会」に所属する劇作家の木下順二と児童文学者の吉沢和夫などの協力を得ながら、東北各県の教育者や研究者から寄稿による編纂を行っている。<sup>16</sup> そのため、各民話のテキストには、原文を執筆した人物と、物語として改作した人物の名前が文末に明記されている。

続いて1977年10月には、当時 TBS 系列で放映されていた「まんが日本昔ばなし」の第107回において、「みちびき地蔵」という10分41秒の短編アニメーションが放送される。制作は、東映動画（現・東映アニメーション）出身のアニメーターである小林治が演出を行い、若松孝二や吉田喜重の助監督を務めた沖島勲が脚本を執筆している。アニメーションの背景を描く美術は、青木稔が担当し、作画は、演出の小林が当時所属していたシンエイ動画が行っている。<sup>17</sup> 「まんが日本昔ばなし」の物語は、俳優の市原悦子と常田富士男が何役もの声を使い分ける語りによって進行する。「みちびき地蔵」で

(246)

は、登場人物の声を市原と常田が演じ、同時に、常田がナレーションも行うという配役になっている。なお、映像の冒頭に出てくる「みちびき地蔵」のタイトル画面には、制作者のクレジットタイトルと共に、「東北農山漁村文化協会（未来社刊）」という文字が表示される。この表記によって、アニメ版の「みちびき地蔵」が『みちのくの民話』を先行テキストとして制作されていることがわかる。

「まんが日本昔ばなし」は、1975年から放送を開始しているが、昔話を題材にしたアニメーション番組が制作された背景には、1960年代頃から隆盛した児童文学における民話ブームがある。そのブームを牽引した人物の一人である児童文学者の松谷みよ子は、1987年に国土社から『語りによる日本の民話1 女川・雄勝の民話』（以後、『女川・雄勝の民話』と記す）を刊行している。これは、1972年から実施してきた、宮城県牡鹿郡女川町指ノ浜在住の岩崎としゑが語る民話の採録をまとめるものであり、口承文芸としての民話を、話者の語りそのままに保存するという意図から制作された民話集である。<sup>18</sup>

『女川・雄勝の民話』以降、「みちびき地蔵」の作品は、東日本大震災が発生した年まで発表されていない。2011年9月、気仙沼大島観光協会は、津波で流されたみちびき地蔵を再建するための費用を賄うという趣旨で、『みちびき地蔵』という絵本を刊行する。<sup>19</sup> 絵本のサイズは、縦18.8cm、横26.3cmの横長の形態で、ページ数は全20ページである。物語は、絵と文が相互に関連する全13画面で構成され、文章は縦書きで、右ページから左ページへと読み進めていく右開きとなっている。絵本の編集と文章の執筆は、三陸新報社・三陸印刷の専務取締役である渡邊（現：朝倉）眞紀が手がけ、レイアウトなどのデザインは、気仙沼市出身のグラフィックデザイナーである渡邊龍太郎が担当している。作画は、和歌山県在住の墨彩画家である福井光が担当している。福井は、毎日書道展、読売書法展、第15回日展などの展覧会に入選した経歴を持ち、現在は店舗ロゴ、商品ロゴ、カレンダーなどのデザインも行っている作家である。<sup>20</sup>

また、翌年の2012年には、YouTubeで、「みちびき地蔵」という12分41秒

のスライドショーが公開される。<sup>21</sup> この作品は、JAPAN TRADITIONAL ARTS ACADEMY（以後、JTAA と記す）という、2011年に結成した芸術家4人組のユニット<sup>22</sup>が、東日本の文化を応援するコンサートのために制作したものである。<sup>23</sup> スライドショーでは、画家である舌ガタロウの水墨画に、二十五絃箏奏者の中井智弥と、邦楽囃子の島村聖香が音楽を加え、本庄康代がナレーションと登場人物の台詞を語る。JTAA は、今昔ものがたりシリーズと称して、この他にも昔話・文学・神話の再話を行っており、「みちびき地蔵」は、その第4作目として制作されたものとなる。

### 3-2 子どものための再話と学術的な採録

これら「みちびき地蔵」をめぐる諸作品には、テキストがどのような目的をもって再話されているかという観点から二つの系統に分類することができる。

第一の系統は、子どものための物語として再話された作品である。これに該当する作品では、物語に登場するキャラクターである母親の息子に「浜吉」あるいは「ハマキチ」という名前を与えている。それは、『みちのくの民話』の「導き地蔵」、「まんが日本昔ばなし」の「みちびき地蔵」、絵本『みちびき地蔵』、JTAA の「みちびき地蔵」の4作品である。伝説を含む民話全般は、はじめから子どもたちのために語り、子どもたちが読むためのものだったわけではない。ヨーロッパにおいて子ども向けの民話が制作されるようになるのは、18世紀末から19世紀末でのことで<sup>24</sup>、日本にいたっては明治20年代後半に、ドイツのヘルバルト派の学説が近代教育にとり入れられ、童話と昔話を素材として教材を編成する方法が実践されてからのことである。<sup>25</sup> それは、「みちびき地蔵」にもあてはまることで、この伝説が子ども向けの物語に変わるのは、『みちのくの民話』の「導き地蔵」以降である。

一方、第二の系統は、学術的な民話の採録によってテキスト化されたものとなる。これに該当するのは、松谷みよ子が岩崎としゑを対象にして、岩崎が語る民話を採録というかたちでまとめた『女川・雄勝の民話』である。



## 4 伝説の形成

### 4-1 岩崎としゑと民話

1957年に『信濃の民話』を刊行して以降、民話の採録と再話を続け、1960年代にはじまる児童文学の昔話ブームを生み出した先駆者である松谷は、1972年から、宮城県牡鹿郡女川町指ノ浜に在住していた岩崎としゑが語ってきた民話の採録を実施している。岩崎は、眼病で入院した孫娘に昔話を語りはじめた63歳の時から、民話の記録をはじめ、宮城県立図書館の館報にも、記録した民話の記事が掲載された語り手である。<sup>26</sup> 松谷がまとめた「岩崎としゑさんのこと」という文によれば、岩崎は、宮城県桃生郡十五浜水浜（現・雄勝町）で暮らしていた8歳から、仲のよい友達や、瓦屋を営んでいた祖父、旅の薬屋、六部僧などから昔話を聞いていたという。<sup>27</sup> その頃に聞いた話として、「一 村ばなし 結婚前に聞いた話」の章段に入れられているのが、「みちびき地藏」の話である。<sup>28</sup> そこで採録された物語は、次のようなものである。

昔、気仙沼の大島にあったこと。

若いおかみさんがねえ、小さい男の子を連れて働きに行ったんだねえ。そすてほの、一生懸命働いて、夕焼け空もすみかけの頃ねえ、ひと暗がりになつとこ、そのお地藏さんのある山を越えてねえ、帰ってきたんだと。

そすたらその地藏さまの近くへきたら、なんだか、がやがや、がやがや、人が大勢でねえ、その地藏さまを拜んでたつて。

あらあ、見たらばどこそれのおばあさんもいれば、どこそこのこうゆう人もいれば、あら、こういうおんちゃんもいるつてねえ、不思議で、子どもの口もふさいで黙って見てたんだと。

近所の人もくれば、知っている人がぞろぞろきて、その地藏さんのとこさ拜んで、そすてほの人が飛ぶようにすていくと、別の人がまたきて、牛と馬も四頭もきたつてねえ。で、みんな飛ぶようにいなくなつてすまったんだと。

おっかなくておっかなくて、ほてうちさきてから、父っさんに話したんだってねえ。

いやいや不思議なこと、でもめったなこと語られねえから人には語んなよってねえ、ゆってたら、二日、三日たったらねえ、大津波がきたんだってねえ。

そすてねえ、津波きてみんな逃げたんだけども、逃げ遅れた人がひき波でみなさらわれて、そこでねえ、がやがや、がやがや、大勢きて押んでいた人たちが、全部死んだんだと。牛も馬も四頭、みんないねくなくて、それからみちびき地蔵と名つけられたんだと。ほれ、死ぬ人をみんなみちびくって。<sup>29</sup>

#### 4-2 伝説の形成

『女川・雄勝の民話』が刊行した1987年に岩崎の年齢は、80歳<sup>30</sup>である。岩崎としゑが8歳の時に「みちびき地蔵」の伝説を聞いていたとなると1915年になるが、これは明治三陸地震津波が発生した1896年から19年後にあたる。もっと歳を経た後に聞いたとしても、岩崎が嫁に行ったのは24歳の時であるというから<sup>31</sup>、まだ、大津波に被災していた世代は、生きていたことになる。記録がないので推測の域を出ないが、松谷が記した略歴を読むかぎり、岩崎は、被災した実話も、自身の祖父と、交流のある身近な人々から耳にしていたはずである。しかし、松谷が岩崎の語りを採録した時には、ある一定の話を備えた物語になっている。では、『女川・雄勝の民話』に収録された「みちびき地蔵」は、岩崎の創作なのかといえば、そうとも言い切れない。何故ならば『みちのくの民話』に収録された「みちびき地蔵」の原文を執筆した小山正平という人物は、宮城県気仙沼市大島小学校の校長であり<sup>32</sup>、大島の人間が再話した「みちびき地蔵」の伝説も物語の基本的構造は、同じだからである。「みちびき地蔵」の伝説が明治三陸地震津波の被災談と関係するならば、被災後20年程度で、実話は伝説に変化していったことになる。

また、実話が伝説に変質するという現象は、岩崎自身のなかでも起きている。岩崎は、明治三陸地震津波の被災談を聞いて、知っていたものと考えら

れる。その後、周辺の人々から同じ話を繰り返し聞くたびに、『女川・雄勝の民話』で採録されたかたちの「みちびき地蔵」の伝説の先行テキストのような話が紛れ込んできた可能性はある。何故そのようなことが言えるのかと言えば、「みちびき地蔵」の伝説そのものも、他の民話や歴史的事件を取りこみながら形成されてきた形跡がみられるからである。すでに触れた明治三陸地震津波との関係性もそうだが、伝説の前半で語られる明日にでも死ぬ運命にある人間が実体のない亡者となって地蔵のもとへ訪れるという話は、「みちびき地蔵」に限られたものではない。東北地方には、死の前兆として、死ぬ運命にある者が、霊的な存在となって宗教的場所に訪れるという民話が広く分布している。もっとも多いのは、「寺に来る死者」型<sup>33</sup>で、柳田国男が著した『遠野物語』の八五にも、危篤状態にあるはずの富豪の主人が菩提寺に訪れ、その晩に亡くなるという話がある。<sup>34</sup> このことが示すのは、はじめ実話として語られてきたものが語り継がれていく中で、次第に伝説や昔話といったものと混合していく現象が起きていることである。

民話研究では、伝説を「過去の歴史的事件に基づき、特定の人物や事物の由来を説明しようとする。疑似神話、あるいは史実と紛らわしい傾向を示す」<sup>35</sup>と定義している。このような伝説の特徴は、再話されていく中で意識的あるいは無意識的に生じる物語の混合によって生み出されるものであることが、「みちびき地蔵」の事例からもうかがえる。

## 5 子どものための再話伝説の形成

劇作家の木下順二が著した『みちのくの民話』の序文では、語り継ぎ、語り変えるなかで、無数の人々の知恵が込められてきた民話を文字化し、一人で読むことによって過去の遺産を生活の中に活かすというこの書の目的をあげており<sup>36</sup>、そのために、「方言で語られた原話を、この本の筆者たちは、児童の心に通りやすい表現で再話している」<sup>37</sup>と記している。序文にあるこの一文が示すのは、この書に収録されているすべての民話が子ども向けに再話されたものだということである。たとえば、「導き地蔵」の文末には、「原文 宮城県気仙沼市大島小学校校長 小山正平」と「はなし 宮城県仙台市

東北大付属小学校教諭 富田博」という再話者の名前があげられている。<sup>38</sup>これは、物語が二度の再話によって形成されたものであることを示している。文末にあげられている小山正平は、当時、みちびき地蔵の伝承が伝えられてきた気仙沼市大島の小学校で校長を務めていた人物である。みちびき地蔵が再話された経緯としては、まず小山が、方言で語られた地元の伝説を、原話に近いかたちで再話し、その後、富田が小山の原文をもとに、子どもの理解しやすい物語にまた再話したというプロセスがあったものと考えられる。

では、具体的にどのような再話が行われているかといえば、まず指摘できるのは、『女川・雄勝の民話』の岩崎版「みちびき地蔵」では、「小さい男の子」<sup>39</sup>となっている幼い息子のキャラクターに「浜吉」<sup>40</sup>という名前を与えていることである。岩崎が語る「みちびき地蔵」の伝説は、子どもだけでなく、大人も聞く物語であるため、物語を進展させる行動の主体は、「小さい男の子」の母親である「若いおかみさん」となる。しかし『みちのくの民話』は、子どものための読み物として物語を再話するため、キャラクターのなかで唯一母親の息子に「浜吉」という名前が与えられる。岩崎の物語では、物語の冒頭でしか記されない「小さな男の子」が、『みちのくの民話』では、物語全体に登場するキャラクターとなり、母親と共に物語を進展させる中心的キャラクターになる。また、この設定は、『みちのくの民話』の系統に属す、作品にも受け継がれている。2011年に刊行した絵本『みちびき地蔵』では、「島にはハマキチという名の子供がいました」<sup>41</sup>と記され、遂には、息子である「ハマキチ」だけが物語の主体となるのである。

## 6 おわりに

伝説と呼ばれる物語は、歴史上の時代・実際にある場所・実在した人物のいずれかが特定されている。<sup>42</sup>この点において、岩崎としゑが語る「導き地蔵」は、「気仙沼の大島」と地名を特定しているため、伝説と認められる。しかし『みちのくの民話』の「導き地蔵」になると、大島という地名は本文になく、タイトルの下に「[宮城県]」<sup>43</sup>と記載されるだけである。「みちびき地蔵」は、実在する地蔵菩薩像にまつわる話であるため、その意味では、ま

だ伝説として認めることができる。それでも「導き地蔵」の場合、地名を語らないことによって、伝説の根底にある過去の歴史的イベントとの関係性が希薄なものになったことは確かである。このような再話は、気仙沼大島という地域で語られてきた物語ではなく、特定の地域から切り離れて、不特定多数の読者に読まれる物語にしようという制作側の意図による。しかし、「みちびき地蔵」は、東日本大震災により、現実の災害に関連する伝説として読みかえられる。震災後、あらたな伝説は、とくに被災した気仙沼の大島において、ふたたび郷土のアイデンティティを確かめるための集合的記憶として位置づけられはじめている。

#### 本文注釈

- 1 「気仙沼大島観光協会 みちびき地蔵」<http://www.oshima-kanko.jp/see/michibiki.html> 2012年11月18日閲覧。
- 2 川森博司『日本昔話の構造と語り手』大阪大学出版会2008年pp.11-18. 小澤俊夫『昔話のコスモロジー—ひとと動物との婚姻譚—』講談社 1994年p.23.
- 3 ジャック・ザイプス著 吉田純子 阿部美春訳『おとぎ話が神話になるとき』紀伊國屋書店 1999年pp.30-31.
- 4 「昔話「みちびき地蔵」から学べ！現代に活かすべき津波の教訓」（『NEVERまとめ』）<http://matome.naver.jp/odai/2130284610580356601> 2012年11月18日閲覧。
- 5 YouTube <http://www.youtube.com/watch?v=pCAbYIODSc0> 2012年11月18日閲覧。
- 6 監修力武常次 武田厚『日本の自然災害 500～1995年 —奈良時代～阪神大震災までを収録—』日本専門図書出版株式会社 1998年pp.308-309. 伊藤和明『日本の地震災害』岩波書店 2005年pp.92-94. 首藤伸夫 今村文彦 越村俊一 佐竹健治 松富英夫編『津波の事典』朝倉書店 2007年pp.28-29. 山下文男『津波災害と防災—三陸津波始末—』古今書院 2008年pp.1-2.
- 7 宮城県『宮城県海嘯誌』宮城県 明治36年pp.403-404.
- 8 東北農山漁村文化協会『みちのくの民話』未来社 1956年p.149.
- 9 同上p.150.
- 10 同上p.151.
- 11 宮城県『宮城県海嘯誌』宮城県p.342.
- 12 MY TOWN 秋田みちのくの週末 「「みちびき地蔵」高橋大輔（探検家）」2012年3月24日付（『朝日新聞デジタル』2012年3月24日）[http://mytown.asahi.com/akita/news.php?k\\_id=05000841203240001](http://mytown.asahi.com/akita/news.php?k_id=05000841203240001) 2012年11月18日閲覧。
- 13 「津波伝承 住民救う 『地蔵より高い所へ』 「本当だった」先祖へ感謝」（『読売新聞』夕刊 2011年5月26日）13面。

- 14 山下文男『津波の恐怖—三陸津波伝承録—』東北大学出版 2005年pp.156-158.
- 15 『みちのくの民話』 pp.4-5.
- 16 同上pp.240-241.
- 17 「シンエイ 動画 会社沿革」 <http://www.shin-ei-animation.jp/modules/company/index.php?id=2> 2012年11月18日閲覧。
- 18 松谷みよ子『あなたも語り手、わたしも語り手』中央公論新社 2000年pp.19-21.
- 19 「宮城まるごと探報 「みちびき地蔵」 絵本が9月17日に発売しました」(情報提供者: 宮城観光連盟) <http://www.miyagi-kankou.or.jp/wom/o-10744> 2012年11月18日閲覧。
- 20 作画福井光 編著渡邊真紀『みちびき地蔵』気仙沼大島観光協会 2011年17日 p.19.  
「ART OFFICE 光」 <http://art-office-ko.com/artist.htm> 2012年11月18日閲覧。
- 21 「JAPAN TRADITIONAL ARTS ACADEMY ジャパトラ」(PDFファイル) [http://www.tomoyanakai.com/jtaa/pdf/japatpra\\_prof.pdf](http://www.tomoyanakai.com/jtaa/pdf/japatpra_prof.pdf) 2012年11月18日閲覧。
- 22 「ジャパトラ JAPAN TRADITIONAL ARTS ACADEMY」 <http://www.tomoyanakai.com/jtaa/index.html> 2012年11月18日閲覧。
- 23 松谷みよ子編著『語りによる日本の民話1 女川・雄勝の民話』 pp.168-169.
- 24 『おとぎ話が神話になるとき』 p.36.
- 25 海後宗臣 仲新 寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年 pp.86-87.
- 26 松谷みよ子編著『語りによる日本の民話1 女川・雄勝の民話』 pp.31-32.
- 27 同上pp.19-21.
- 28 同上p.35.
- 29 同上pp.168-169.
- 30 同上p.34.
- 31 同上p.22.
- 32 『みちびき地蔵』 p.151.
- 33 松谷みよ子『現代民話考5』筑摩書房 2003年pp.267-286.
- 34 柳田国男『遠野物語 山の人生』岩波書店 1976年4月pp.55-56.
- 35 野村純一編『昔話・伝説必携』學燈社 1992年p.170.
- 36 『みちのくの民話』 p.4.
- 37 同上p.4.
- 38 同上p.151.
- 39 『語りによる日本の民話1 女川・雄勝の民話』 p.168.
- 40 『みちのくの民話』 p.148.
- 41 『みちびき地蔵』 p.4.
- 42 福田晃 常光徹 斎藤寿始子編『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社 2000年 p.5. 小澤俊夫『昔話入門』ぎょうせい 1997年pp.1-13.
- 43 『みちのくの民話』 p.148.